愛隣幼稚園

園だより

15. 9月号

大好きな人が読んでくれたお話

今年の夏休みはお盆を境に夏から秋へとバトンが渡されてしまった感がありました。賑やかだった蝉たちに代って、お日様が沈むと草むらからは秋の虫の声が賑やかになり始めています。さてこれからは“〇〇の秋”がやってきます。皆さんはどんな文字を入れるでしょうか？

夏休みが終わり、子どもたちは２冊の絵本を持ってホールに上がっていきました。初日は図書の返却日です。２冊ではきっと足りなかったかもしれません。図書館に行ったり、お家にある絵本も読んでもらったりしたでしょうか。この「お家の人と一緒に絵本を読む時間」も私たちが大切に考えていることのひとつです。私の両親は共働きでしたが、忙しい中、母に読んでもらった大好きな本の記憶、お話の記憶が残っています。あいりんまつりではアレンジバージョンでしたが『ちびくろさんぼ』（岩波書店の日本語版は 1953 年刊行）、今でも子どもたちが大好きな『いやいやえん』（福音館 1962 年刊行、驚きました！私の生まれた年です。）はずっとずっと忘れられないお話でした。自分が親になり娘のために『いやいやえん』を購入した時は、大切な友だちと再会したようなそんなじんわりと温かい感情が湧いてきました。娘たちより私が興奮して喜んでいました。それがもう 20 年前のこと。奥付には第 78 版とありました。何故、子どもたちはこの作品が好きなのでしょう。『いやいやえん』という作品が持つ魅力が子どもたちを惹きつけていることは言うまでもありません。私もしげるやおおかみが大好きです。しげるはやんちゃだし、おおかみはやっぱりおおかみでおおかみらしいことを考えてる。でもこのお話の中で彼らはありのままを良しとされ、愛されてそこにいる。しげるはいい子にならなくていいし、おおかみも善良にならなくていい、むしろならない方がいいのです。そこに子どもたちは（私も）自分を重ね共感しているような気がします。しかしもうひとつ、この作品が愛され続けている大切な理由があるように思います。それは他の絵本などと同じように『いやいやえん』が読んでもらう本であるということにあります。この本にはいくつかの短編が収められています。挿絵もありますが色は付けられていません。字が多い本です。全編を読み通すと長いお話です。しかし内容は年中から年長の子どもたちにぴったりです。それで、どうしても読んでくれる人が必要になるのです。絵本を読むことは、お家の人には少し厄介な事です。忙しいのです。あれもこれも家の仕事はきりがない。まして、小さな子どもたちとの日々に余裕を見つけることはなかなか難しいものです。それでも子どもたちは大好きな人には自分だけを見てほしい、一緒に居てほしいと様々な攻勢を仕掛けてきます。「読んで、読んで！」もその一つです。全てに応えることできませんが、どこかで必ず応えてあげて欲しいと私は願っています。大好きなお家の人と過ごす時が、子どもたちにとって至福の時なのです。だからこそ、その時に読んでもらったお話は、心の中に深く記憶されます。このことは脳の発達とも深く関わると聞きました。「読み聞かせ」をする時、子どもたち脳の中では感情や情動を司る部分が活発に動きます。絵と言葉（語り掛け）を介して子どもたちは主人公に自分を重ね、様々な経験をします。感情が生まれ、心が動かされます。おもしろい、楽しい、好き、嫌い、怒り、悲しみなど、人として生きていく上で重要な「心」がこの時に成長しているのだそうです。大好きな人の語り掛けが果たす役割の大きさを感じます。生後間もない赤ちゃんもお母さんの声を聞き分け反応しています。腕の中の乳飲み子に微笑み、語り掛けるという当たり前の事が、「心」を育むために不可欠であることも覚えておきたいと思います。秋の夜、お気に入りの一冊で、子どもたちと豊かな時間を過ごせますように。